ISSN 1342－632X

国際資料研報 Documenting Japan International Report 国際資料研報 Documenting Japan International Report 国際資料研報 Documenting Japan International Report 国際資料研報 Documenting Japan International Report

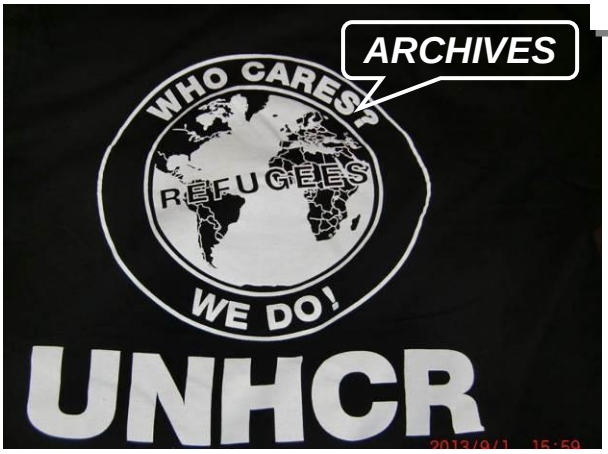
DJI レポート

No.96　20130930

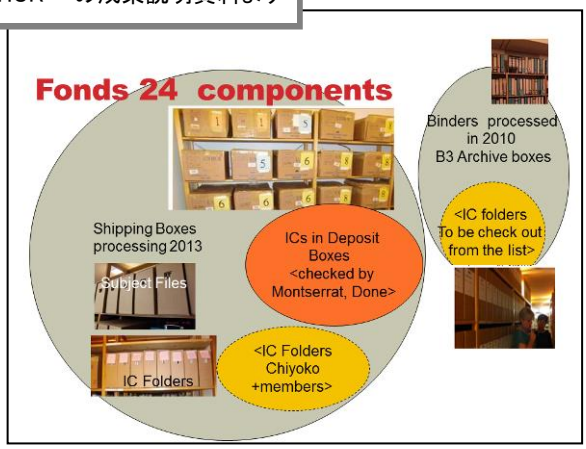
国際資料研報 Documenting Japan International Report 国際資料研報 Documenting Japan International Report 国際資料研報 Documenting Japan International Report 国際資料研報 Documenting Japan International Report

〒251-0045　神奈川県藤沢市辻堂東海岸3－8－24　fax+phone　0466－31－5061　Email：djiarchiv@yahoo.co.jp

5 年目、ジュネーブのボランティア



UNHCR への成果説明資料より



見えた業務の全貌

☆☆☆

【見学レポート】

新館見学！フランス国立公文書館 ピエールフィット・シュル・セーヌ館

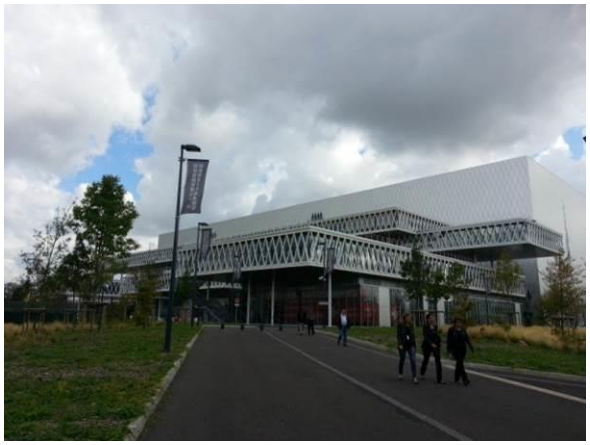
～～広くて明るい、新しい空間の中で近現代の記録資料を求める多くの利用者が印象的～～

元ナミ（学習院大学大学院）

ジュネーブでのボランティアを終え 9 月 7 日からはパリ。10 日(火)は国立公文書館新館を目指す。

■アクセス

パリのメトロ 13 番線終点の Saint-Denis Université で降りて改札を出たら、もうそこは正面にパリ第 8 大学、右側に国立公文書館の案内が見えていた。そのまま右側に歩いたら、いつの間にか新しい建物が出てくる。これが新館のピエールフィット・シュル・セーヌ館（以下ピエールフィット館）だ。正門から入って左側は職員用出入り口、右側（直進）に行けば一般利用者用の出入り口が出てくる。前日見学した国立公文書館本館（スービーズ館）と同様、ピエールフィット館も、最初はカバンなど所持品の肉眼検査を行うが、危険なものの確認であり、食べ物や飲み物の所持は可能である（ロッカーに入れるため）。ここは、概ねフランス革命期以降の文書資料と個人由来文書等を所蔵している。パリ館で見られる「古文書」類より、目になじんだ近現代の「公文書」類の閲覧者が多かった。



↑フランス国立公文書館・ピエールフィット・シュール・セーヌ館全景　Salle des Inventaires（目録検索室）↑
いずれも 2013.09.09 筆者撮影。Archives nationale Pierrefitte-sur-seine の建物©Massimiliano Fuksas

■写真撮影のルール

対応してくれたアーキビストは、Salle des Inventaires 目録検索室の Charlotte Leblanc さん。閲覧室内部の写真撮影は禁止されているが、こちらの事情を説明して、撮影を許可してもらった。掲載写真はすべて筆者撮影のものである。非営利的出版に限って掲載も可能。但し、写真使用については問い合わせ先（Jean-François Quemin さんのメールアドレス）と、建築物の著作権が Massimiliano Fuksas にあることを必ず明記することが前提と教えてもらった。（館内の写真利用はルールが厳しく、出版する場合や、営利目的利用の場合は、必ず担当者に利用について問い合わせる必要があるということであった。今回は非営利目的刊行物への掲載利用なので、直接許可を取らなかったことを断っておく。）

■利用者登録と閲覧請求

優しい登録担当職員の案内により、利用者登録カードを作った。アメリカの NARA でも同様だったが、利用者登録にパスポートは必修である。この利用者登録によって、館内のパソコンからネット上で利用者登録をし、ネット上の検索目録や検索手段を利用し、資料の請求が可能になる。資料の請求から利用までのシミュレーションは Charlotte さんの助けを得て、資料の閲覧申請する直前の段階まで到達した。が、デスク（利用座席）の指定ができなかった。そこで閲覧室でもう一度挑戦した。ところが資料の請求は 15 時までできっちり締め切り。結果は残念ながら資料の請求はできなかった。でも、ネット上でも予約が可能、もし次の日の午前中に来るなら予約なしの当日請求のほうが出納に時間が掛からないと教えてもらった。

■今回の見学成果

利用規則をよく調べていくか、現地語に慣れてからでないと、せっかくの調査がうまくいかないことが実感できたのが今回の成果。研究に参考となりそうな書籍を何冊か購入して、調査完了。

次回はパリ市公文書館を紹介します。（続く）

ピエールフィット館へのアクセス

◆Archives Nationales Site de Pierrefitte-sur-Seine
住所：59 rue Guynemer, 93380 Pierrefitte-sur-Seine
交通：メトロ 13 番線終点 Saint-Denis Université
http://www.archives-nationales.culture.gouv.fr/sia/fr/web/guest/site-de-pierrefitte-sur-seine

ロンドンで教会のアーカイブ調査！
～マイケル・ローパー氏との邂逅＠エセックスも～

下田尊久（藤女子大学）

2013 年も UNHCR のシニア・ボランティアに全期間の参加を実現しました。このボランティア期間の週末を利用してロンドン郊外の友人宅を拠点に、北海道のキリスト教に大きな足跡を遺した宣教団体 CMS の研究活動を続けています。これまでにオックスフォード郊外の CMS 本部図書館とバーミンガム大学図書館を訪問し、宣教活動の記録資料の調査や CMS 本部のアーキビストに北海道にある宣教師の遺した資料の現状について情報提供することができました。

■ロンドン・ウェストミンスター寺院訪問

今夏は、ウェストミンスター寺院図書館を訪ねることが出来ました。この寺院は、10 世紀に創設された英国国教会の聖堂でビッグベンのある宮殿（現国会議事堂）に隣接し、国王や CMS

設立に大きな影響を与えた人物も葬られています。図書館員のトラウルズ氏とのアポは午後 3 時、溢れる観光客を横目に聖堂内廊下の入口から、貴重図書や、中世の市の財政記録や現在の皇室に関わる記録資料等が保存されている図書館へ。ここで聖堂アーカイブの保存・提供のシステムについて学ぶ機会を得ました。検索手段はインデックス箱に排列された図書館の目録カードのような紙片と、ディスクリプションと呼ばれる箱に入ったノートの 3 分の 1 の大きさの短冊状の紙に書かれた詳細情報で、これが原資料と固有番号で連動しています。7 万点までは通し番号、その後は分類コードのついた番号で整理されています。原資料はこの聖堂上部の礼拝堂を見下ろす空間に保管されています。湿度や温度の管理は一切していないのに最も安定した環境とのこと。あとで日本のアーキビストに聞くと日本でも古城のような建物にはそのように特別な機器を用いずに自然に保存の出来る環境を持っているところがあると聞いたことがあるとのことでした。古今東西、人間の知恵というか経験から得たものなのだと感じます。この

アーカイブの閲覧は 3 席しかない閲覧室で行われ、一度に利用できるのは 2 名で、残り 1 席には職員が同席します。また、図書がある図書室は古めかしい書架に、初期の印刷本や表紙に鎖附き図書の名残がある貴重な図書等が並び、補修も予算の許す範囲で継続的に僅かずつ行っているそうです。なかには英国図書館（BL）にもない図書もあり、タイムスリップしたような空間でした。

■エセックス州での週末

私にとってロンドン東部に隣接するエセックス州での週末には、もうひとつの楽しみがあります。それは友人夫妻と共にこの地域の人々と交わる機会があることです。懐かしい時間でもあり、また新しい発見の場でもあります。じつは昨年、この友人宅に滞在していた時に、この村にもかつて Royal Archivist だったマイケルという友人がいて一緒に教会の仕事をしている

マイケル・ローパー氏（右）と筆者

ので来年来たら紹介しようと約束をしてくれました。そしてそのマイケルが今年の滞在時に友人宅を訪ねてきて下さることになっていました。陽射しがとても気持ちの良い好天の午後のティータイムにその老紳士がやってきました。背が高くとても柔和な方でした。この村に移り住んだのは１２年前とのことで、今はとても気に入っていて村の歴史研究グループで活動していることや、ご夫婦で教会の聖歌隊のメンバーであること、現役引退後は会議で世界中を歩いたことなど話して下さいました。なかでも 1986 年と 1999 年の二度の来日の印象と、その間の記録管理の環境の進化を称賛し、誇らしげに話して下さいました。お話には安澤先生、小川雄二郎・千代子両先生のお名前が出てきました。それがマイケル・ローパー氏だったのです。最も基本的な原理は“respect for original order”そして“preservation rather than conservation”であると。

■むすび

記録資料を追いかけているうちにいろいろな糸が絡まって、また広がっていきます。そうこうしていると不思議な出会いがまた新しい領域へと私を誘ってくれるのです。このような思わぬ出会いを経験できたのもこのプロジェクトのお陰だと小川千代子先生には感謝しています。

（完）

【チヨコの視点】

国際赤十字委員会アーカイブの訪問調査と赤十字赤新月博物館見学

ジュネーブ最初の木曜日、8 月 29 日は、ボランティア参加者全員の６名で、午前中は、ICRC（国際赤十字委員会）を訪問、この組織のアーカイブと記録管理についての説明を伺い、書庫見学をさせてもらった。

■ICRC（国際赤十字委員会）アーカイブ

ICRC は UNOG 国連ジュネーブ事務所を眼下に見下ろす小高い丘の上にある。2007 年には、写真の建物の中に受付があったが、6 年後の今年は、丘の上の向こう側に新しい建物が出来ていて、受付もこちらに引っ越していた。受付では、UNHCR で支給された入館用「バッチ」と引換えに赤い紐のついた ICRC 訪問者用のバッチを受け取り、首から下げた。アーカイブと記録管理の担当部長、ブロンデル氏が受付で出迎えてくれた。

ブロンデル氏は穏やかでちょっとはにかみ屋のようだった。歓迎の挨拶の後に、ブロンデル氏は私たちを地下のアーカイブ閲覧室に案内すると、姿を消した。代わって英語が得意らしいアーキビスト、ベンジー氏が登場した。ICRC の非現用アーカイブについて、日本関係資料を事例に説明する。ICRC 総裁の訃報に接した佐野常民日本赤十字社社長が日本語で認めたお悔やみ状は、日赤の罫紙、墨筆。英語にして読み上げたところ、ベ氏はその手紙の意味を理解し、存在理由を納得した様子。その後閲覧室から私たちは書庫へと誘われた。

書庫は、2007 年の見学の際にも感じたが、実に清潔に保たれている。年代物の、明治期ぐらいの資料もホコリによる劣化はほとんど見られない。説明の終わりに、ベ氏はカラーコピーしたアーカイブ資料を、ICRC 専用のフォルダに入れて、お土産にくださった。こういうものは、専門的でとても嬉しい。

続いてイサベルさんとマリーカルメンさんという二人の女性が資料をたくさんもって登場。マリーカルメンさんは紙文書の管理、イサベルさんは電子文書管理について、それぞれ 15 分ずつということで、すごい勢いで説明を始めた。電子文書管理の方はインターフェースのプリントアウトを使って説明してくれたので、かなり具体的によくわかったが、紙文書の管理は、苦戦だった。この説明の途中で静かに室内に戻っ

てきたブロンデル氏は、私が「日常的に英語は使わないので、ご説明いただいたお話は３～５割わかったかどうか」とおずおず言い訳をしたのを聞いていたようだ。

まとめの質疑応答の時間、ブロンデル氏は、「実は、私はドイツ語ができないのに大学はドイツに行ってしまった。先生に言葉がわからないからやめようかと思う、と言ったら、わかったところだけで十分。１割わかればそれでいい、と言われたことがある。皆さん、３割５割なんて、素晴らしいですよ。」と、変なところでお褒めに預かった。２時間の見学予定は、２時間 20 分位で終了した。

musée genève

■赤十字赤新月博物館

同日午後は、赤十字赤新月博物館を一般見学者として見学した。2011 年以来改築工事で閉館していたので、3 年ぶりだ。受付には日本人スタッフがいたので、とてもありがたかった。入館料は、シニア料金も設定されていることを、今回初めて知った。

ヘッドセットをつけて新しい展示を見る。

展示資料の目玉、世界遺産登録されている第１次世界大戦中の戦争捕虜の個人名を記したカードは、以前と同じくガラスケースに収められていた。但し、今回の展示替えにより、この捕虜カードの複製が準備され、見学者が自由に複製カードを手に取ることができるようになっていた。複製とはいえ、実物そっくりにできているカードを実際に手に取り、行方不明のハンスだかウィリアムだかが、捕虜カードの中にあるのかどうかを探すという模擬探索体験ができるのである。やってみると、最初のうちは「こんなこと、昔の図書カード時代の図書館でもやってたな」というほどの軽い気持ちでカードを繰っていた。だが、そのハンスのカードがなかなか見つからない。一枚、また一枚と探している捕虜カードが減っていくに従い、もしかしたら結局ハンスは見つからないのではないかという焦燥感に駆られ始めた。その時、ハンスが見ず知らずのハンスではなくもし肉親だったら、恋人だったらどんな気持ちになるのだろうか、という思いが私の心をよぎった。その思いがきっかけで引きずり出されてきた、探そうとする人への思いと、見つかって欲しいと願う切なさ、みつからなかったらどうしようかと思う恐ろしさで、私は身がすくんだ。疑似体験なのに、、、。

日本なら、さしずめ「岸壁の母」の思いだろうか。あまたあるカードのなかのたった一枚が、肉親の手がかりそのものだという実感、いや疑似体験なのだけれども、なんだか涙が出そうになってきた。ちょっと見るだけのつもりだったのに、その疑似体験展示で過ごした時間は思いのほか長引いてしまった。

だが、もっと印象深かったのは ICRC の反省とお詫びの展示。赤十字は、1930～40 年頃のユダヤ人対応のあり方が間違いだったとする展示があった。日本では、こういう息の長い検討や反省がなかやか見られそうもない。例えば、人道的考えから命令に反してユダヤ人にビザを発給したことで外務省を追われた杉原千畝氏の行動の評価は、当時と現在では全く変わった。社会の変化は確かに杉原氏への評価を変えた。これは時の経過がもたらす変化が人道と人権に沿って動いた事例だと思う。日本人として、今は杉原氏という人の存在を誇りとすることができるのは、幸せだ。しかし、氏への評価の変更を明確に政府側は明らかにしただろうか。杉原氏の名誉は正式に回復されたのだろうか。

赤十字博物館の展示のごとく、長期的な反省と謝罪による人道と人権尊重の社会がこれからも続きますように。

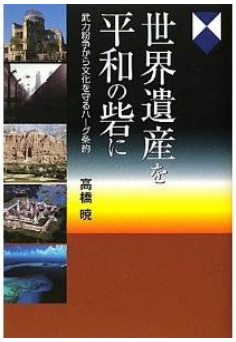
（小川千代子）

外壁が鏡になっている博物館入口で、2013 年 8 月 29 日。

ブルーシールド研究会
～7 月 22 日、東京文化財研究所で開催～

ブルーシールドのマーク

下田尊久（藤女子大学）



http://www.j-muse.or.jp/02program/pdf/blueshield_20130722.pdf?cat=10

2013 年 7 月 22 日(月曜日)　東京文化財研究所においてブルーシールド研究会が開催された。主催者である独立行政法人国立文化財機構本部事務局長の栗原祐司氏がコーディネーターとなり 2 時間ほどの勉強会となった。今回は昨年 9 月の 2012 年文化遺産国際協力コンソーシアム研究会を受けて、日本イコモス国内委員会の後援を得て開催したこと、またユネスコ本部太平洋州事務所勤務の高橋暁氏の来日に合わせて高橋氏を講師としてお招きしたことなどの説明があった。

テーマはブルーシールド国内委員会の早期設立を念頭においた勉強会で、高橋氏による「世界遺産を平和の礎に－武力紛争から文化を守るハーグ条約－」と題する 2010 年に発刊された高橋氏による同名の著書(**右図**)に沿った講演となっていた。全体としてブルーシールド国内委員会の役割と必要性を再確認したものであった。会場では、主催者による著書の紹介・頒布もあり、広く一般に理解を求めるための講演会であった。質疑のなかでイコモス国内委員会、日本博物館協会や県立博物館の担当者から近況や質問などがあった。個人的には日本が中心となってアジア地域における文化遺産保護の国際協力が一日も早く実現することを望む。

●◆▼やぶにらみ文献紹介【●図書◆論文▼逐次刊行物■その他】

●虚妄の三国同盟–発掘・日米開戦前夜外交秘史

旧知のジャーナリスト、渡辺延志さんの著書。日本を破滅へと導いた同盟成立にまつわる謎と「松岡外交」の内実を解き明かす、迫真の歴史ノンフィクション、とオビの解説があり、それだけでも何やらドキドキしてしまう。

●テーマは、ニセ文書をつかまされた松岡外相と日本政府が、その国内的対面維持のために偽文書を正式文書と強弁した、という事実。一つの偽文書をホンモノとしたがために、日本政府はそこから端を発したあらゆる矛盾に目をつぶらなければなくなってしまったという、歴史的な不幸がそれに続いた。そのウソが戦後の東京裁判の中で検証されていたことを渡辺さんは裁判記録の中から「再発見」する。

●アマゾンのカスタマーレビューでは、「東京裁判における国際検察局による尋問調書の中に、存在は知られていたのだが、あまり注目を集めてこなかったドイツ人外交官（在日独大使館勤務）たちの調書があった。これらの調書を精読したうえで、さらに松岡洋右外相の調書を解読することを通じて、松岡外相による三国同盟樹立・日ソ中立条約締結に至る舞台裏を、重層的にかつスリリングに描くことに成功しています。」とある。直接話法を多用して「ノンフィクション」の描き方は出色である。

●渡辺さんは、東京裁判の記録と、米国国立公文書館の記録戸を突き合わせ、ドイツ側には見られず日本側にだけ証拠資料として記録されている「手紙」があることを突き止めた。そこから彼は、松岡が日独伊三国同盟の締結のプロセスで、本来必要な公文書をドイツ側からもらうことを怠り（又はそれを実現することができず)、代わりに日本に好意的であったドイツの外交官が個人的にしたためた手紙を根拠資料に用いて日本国内の（枢密院での？）合意取り付けを行ったという「事実」を推定してた。その後、その「手紙」こそが、日独伊三国同盟の破綻と敗戦の原因かも、と推測している。

●筆者の立場で考えると、外交文書を日常的に取り扱う人が、国家間の条約締結のプロセスで、私的な手紙を根拠として上層部に説明を行うというのは、論理的に考えてオカシイ。だが、往時の日本国内では、そのような疑問は提示されず、むしろ日本側に必要な事項が記されたものであれば、それが公文書であるかどうかを見極めることよりも、その文書の存在そのものの方を重んじてしまったということらしい。そこに筆者は強く注目した。

●よく、日本の政治家も行政官も、責任を取らないとか、曖昧なことを飲み込んでしまうとかといった評価を見聞する。これは、筆者に言わせれば、責任の所在を明確にしない人々がなぜそんなことをしてしまうのかということについて、ひどく情緒的な表現で「逃げ」るような説明でしかない。本当は、日本の政治家も役人も、文書が正式文書であるのか、内容は公のことであっても、それ自体が責任を負うことを前提に作成されていない、いうなれば「空手形」なのか、そんなことを見極める能力すらなかったのではないだろうか。。。

●実をいうと筆者は小学校から高校まで、歴

史、特に日本史は時間切れで教科書は途中で打ち切られた経験がある。大正デモクラシー台頭あたりまではキチンと説明を聞いたのに、昭和の大恐慌に差しかかるころ卒業式が近づき、教室でそれ以降の歴史を習っていない。だから、昭和前期、日本が中国とモメた日支事変や、国内的には５.１５事件、２．２６事件など、コトバ位は聞いたことがあるような気がするものの、発生の具体的な時期やら、前提となる大まかな社会情勢などは、よくわからない。

●それでも、知りたいから読み進む。ノンフィクションの特色なのだろうが、登場人物があたかもそのように発言したかのように、個人の発言が直接話法で表現され、それを軸にストーリーが展開される。それを捉えるのが苦手な私。

●登場人物にせよ、東京裁判という「舞台」にせよ、筆者はほとんど知識を持ち合わせないから、読み進むにも、どこまでが著者の創作でどこからが資料的裏付＝根拠ある記述なのかを見極めるのは、かなりむつかしかった。だが、しばらくすると、読み手としての自分が、全体をまずはフィクションとして受け入れ、そこに繰り広げられるストーリーを楽しむ、そんな心持ちになった。そして、ようやくこの本を読むスピードが少し上がった。昭和前期の歴史の素養なしに読むのはむつかしいが、面白い本だ。A5 判 342 頁、ハードカバー、岩波書店、2013 年、2800 円＋税

●情報資源の社会制度と経営
シリーズ図書館情報学 3

第１章は、混沌として見える情報資源とそれを取り巻く制度についての根本先生の考察が魅力的。第５章は、根本・古賀崇、研谷紀夫による図書館とアーカイブ、デジタル･アーカイブの論考。実は、著者の一人古賀崇氏から別途、書評を依頼されている。うーむ。。。根本彰編、286 頁、ソフトカバー、東京大学出版会、2013 年、3360 円＋税

・訂正します！95号文献紹介「先知録」中の変換ミス2箇所
m(－ －)m　秋田さん、ごめんなさい。

正	誤
正直、私にとって先知録の解読は単調で…	正直、私にとって先知録の買得は、短調で…
持ち主の侍が公務のマニュアルとして	持ち主の侍が工務のマニュアルとして

◇◆◇アーキビストの消息（順不同、敬称略)◇◆◇　【凡例：■機関●個人】

✿館内の自販機に注目！

右は、とある日本のアーカイブ機関に置かれている自販機の写真です。注目していただきたいのは、その値段設定。街中のモノに比べて、かなり廉価です。「こんなの当たり前、見慣れてる」という方は、アーカイブの世界にドップリですね。「エッ、や、安い!」という方はフツーの生活をしている証拠です。なんで、この値段設定かというと、設置場所がオオヤケなので「家賃」がいらないらしい。。。

ちなみに、アーカイブ機関は、平等閲覧の原則(!)ですから、誰でも入館 OK です。ヾ(@⌒ー⌒@)ノ

●特集　千代子のあしあと●◆▼●◆›●図書◆論文▼逐次刊行物■その他●◆▼●◆

▼DJIレポート　No.96 2013 年 9 月 30 日アップ、8 頁、PDF。Web 国際資料研究所 www.djichiiyoko.com
▼北大時報(2013.8　月号)部局ニュース「大学文書館で資料見学学習会を開催」写真有 http://www.hokudai.ac.jp/bureau/news/jihou/jihou1308/713_28.html

ＤＪＩ国際資料研究所の主な活動　2013 年 6 月 21 日～2013 年 9 月 30 日

＜執筆＞
・『DJI レポート』No.96　20130930 発行　8頁 www.djichiiyoko.com　に PDF 掲載
＜出講＞
6 月 25,30 日、7月 2,9,16 日、東京大学大学院情報学環、東京
6 月 20,30 日、7月 4,11,18,25 日中央大学文学部「記録管理論」 東京
6 月 22,29 日、7月 6,13,20,27 日、8 月1日　藤女子大学図書館情報学課程「生涯学習概論」「図書館情報資源組織論」 8 月 5,6 日、9 月 21,28 日「資料特論」、9 月 21,28 日「情報資源組織論」札幌
7月5日、9 月 20 日学習院大学「記録保存と現代」東京
9 月 19 日　東京雑学大学「アーカイブの世界」、田無

9 月 25 日　鶴見大学文学部「記録管理論」

＜主催＞

7月 14 日　湘南バーベキューパーティ、国際資料研究所、藤沢

＜見学＞

6 月 30 日　寒川文書館、中央大学・東京大学合同見学会、31名、神奈川県
8 月 5 日　北海道大学文書館、藤女子大学、6 名、札幌
8 月 6 日　札幌市公文書館、藤女子大学、6 名、札幌
8 月 23 日　国連ジュネーブ事務所アーカイブ、スイス
8 月 24 日　ツォー駅近辺繁華街、ベルリン、ドイツ
8 月 29 日　国際赤十字委員会アーカイブ、赤十字赤新月博物館、ジュネーブ、スイス
9 月 18 日　しょうけい館、記録管理学会研究例会、東京

＜参加＞

7 月 1 日　札幌市公文書館開館式、札幌
7 月 3 日、記録管理学会理事会、東京
7 月 7 日　、「パワー・トゥ・ザ・ピープル上映会＋藤野電力さん活動紹介、鵠沼公民館、藤沢
7月 23 日　神奈川工大アーカイビングプロジェクト、厚木
8 月 22 日－ 9 月 9 日　UNHCR アーカイブ整理シニア・ボランティア、ジュネーブ、スイス
9 月 25 日　「原発」国民投票のココロ、東京
9 月 27 日　専門図書館協議会集会、札幌
9 月 29 日　全国アーカイブ・レコマネ大会、東京

****

■巻末随想・ハイフェッツのユモレスク

前回は、ハイフェッツ（Jascha Heifetz）が演奏するチャイコフスキーのコンチェルトにハマったところだったが、その後ハイフェッツという演奏家にのめり込んだ。なぜか。ハイフェッツが素晴らしい、悪魔的に素晴らしいと私が感じたからだ。

◆生い立ち・20 世紀最高の演奏家、と評されているハイフェッツは、1901 年 12 月生まれ、1987 年 11 月に没した。帝政ロシア時代のリトアニアに生まれたユダヤ人。父もバイオリニストだった。幼くしてペテルスブルの音楽院でレオポルド・アウワー、フリッツ・クライスラーにその才能を称えられ、演奏家として欧州各地をまわり 10 代から家計を支えた。

◆1917 年には政情不安の故郷を去り米国に移住、1925 年には市民権を得る。1920 年代には世界各地を演奏旅行、関東大震災直後の来日の際「義捐演奏会」を開催した。キモノを着てキセルを手にした写真も残さる。この頃のハイフェッツは長髪で、おどけた表情がしばしば見られる。

◆17 歳でカーネギーホールでのデビューを経て彼は世界的な演奏家となる。30 歳前後からの彼は髪を短く刈り込み、額を大きく見せ、表情は険しいか、冷たく硬い。年譜をみると、20 代後半に婚約し、まもなく別のバツイチの女性と結婚、2児に恵まれている。結婚は十数年で終わり、その 2 年後に再婚するが、これも一児をもうけながら再び十数年後還暦過ぎで離婚。その後は家族のないまま生涯をとじた。後進の指導は自分の義務と、40代から教え始めた。UCLA や USC でのレッスンは晩年まで続けた。但し教師としての評価は分かれている。

◆ハイフェッツは冷徹、ポーカーフェース、スフィンクスのようだ、と言われているが、他方彼の近くにいてよく知る人は「激しくて、熱い」「コトバよりも楽器の演奏で心を表現する」とも。ハイフェッツは「人生？全部フィクションだヨ」と言い放ったという逸話もある。とてもむつかしい人だという人物評は、無表情のころのハイフェッツ本人に接した人々のホンネだろう。本人もまた、そのように振舞うことで自分を保とうとしていたのかもしれない。

◆伝記 DVD には、晩年のハイフェッツの身辺には、伴奏者、ティーチング・アシスタント、セクレタリなどの肩書きで、お世話係が登場する。ついでに言うと、この DVD にはハイフェッツ誕生の地のアーキビストも登場し、彼の若い頃の手紙やコンサートのポスターなどを見せてくれる。アーキビストは女性で、地味でしっかりした雰囲気の人。同業者の登場に私は感動した。

◆で、ユモレスク。これは YouTube で見つけた演奏。あとで CD を購入したところ、同じ演奏らしかった。録音は 1944 年。なので、一回目の離婚の直前期の演奏と思われる。そういう背景情報を加味してこの演奏を聴くと、ハイフェッツはコトバ以上に演奏でその心情を激しく吐露しているようにさえ思われる。家族への揺れる思い、愛情あふれる平穏な日々への惜別の念が、完璧な演奏のなかにそれこそ「てんこもり」。

◆ハイフェッツ1944年録音の、ユモレスクの演奏は、コトバに表さない、音楽表現の中でだけ、ほかの人にはわかるはずのないハイフェッツ独自の用語＝音楽演奏で、思いの丈を迸らせているように聞こえてならない。激しく、暖かく、哀しいこの演奏、私は自分の葬いに使ってもらいたいと思う。YouTube 聞いてみて！
→http://www.youtube.com/watch?v=uB8mzdO3MnI

◆なお、ユモレスクの演奏は YouTube でも各種出てくる。バイオリン演奏を聴き比べてみたら、ヨーゼフ・スークは、さらりと明るい。作曲者ドボルザークのひ孫という血縁から来る気楽さがあるのかな。デイヴィッド・ギャレットはさしずめ 21 世紀のハイフェッツか。クライスラーはハイフェッツの演奏様式のモデルときいた。パールマンとヨーヨーマの合奏は情の厚さが心地よく、小学生のエミリーのおさらい会は、なんとも懐かしい。ピアノのユモレスクも聞こえた。フルートもあった。録音技術は、音楽演奏という時間を材料にした「生もの」を長期保存し、過去も現在も同じ土俵で比べることを可能にした。でも私は Heifetz だ!(ち)

Documenting Japan International Report 国際資料研究所報　ISSN 1342－632X
DJIレポート　DJIホームページ: http://www.djichiiyoko.com　No. 96　20130930
発行所：国際資料研究所 Documenting Japan International　代表 小川 千代子
〒251-0045 神奈川県藤沢市辻堂東海岸3－8－24 fax+ phone 0466－31－5061　DJI ブログ: http://djiarchiv.exblog.jp/
DJI メル友速報は、DJI レポートの無料メルマガです。配信ご希望の方はお申し込みください。 Email:djiarchiv@yahoo.co.jp